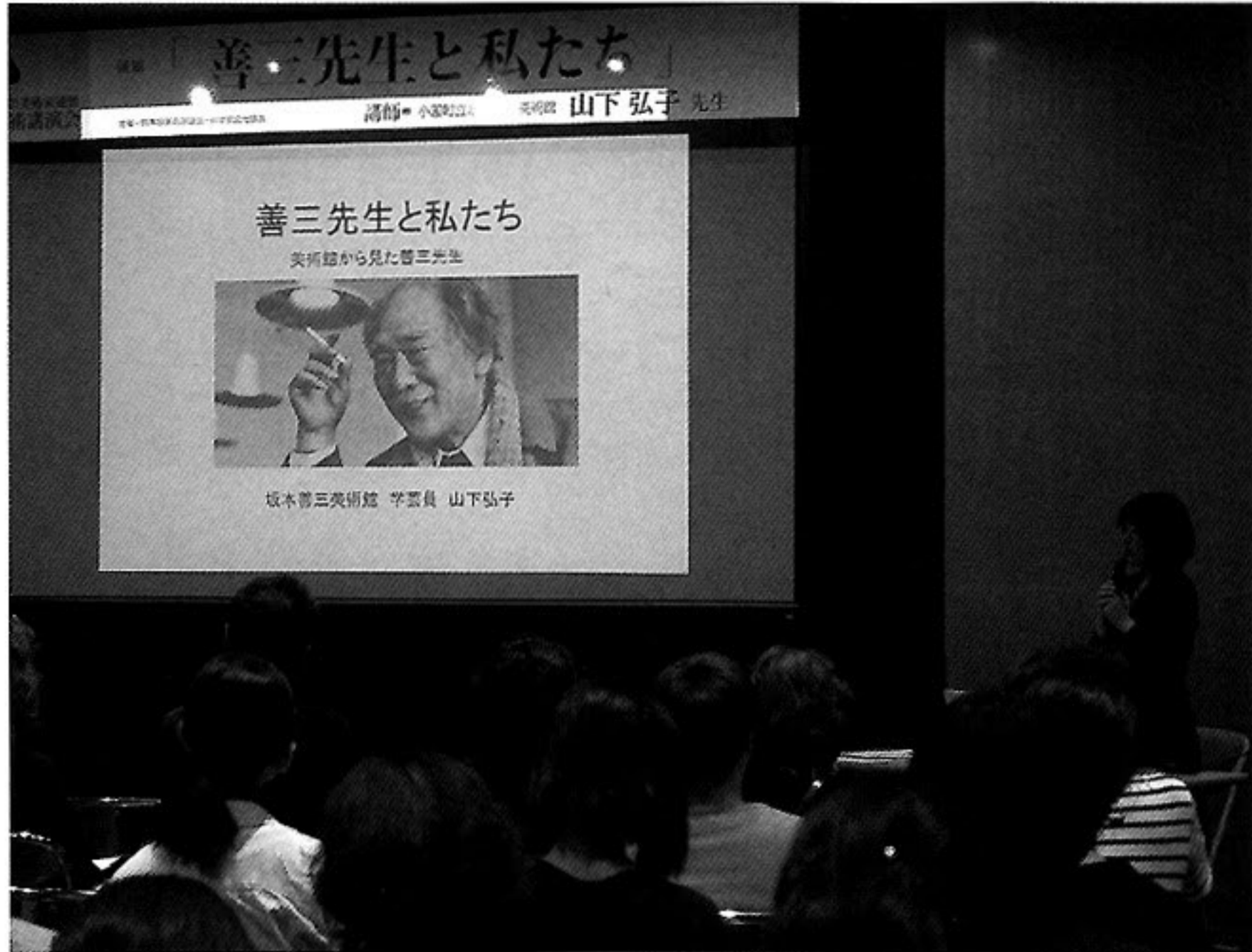


演題 「善三先生と私たち」

小国町立坂本善三美術館学芸員 山下弘子 先生



「ここには善三先生に直接会った人がたくさんおられて、そういう場でお話するのは、自分史上最大のプレッシャーです」と言ってお話を始められた山下先生は、宮崎市出身で一九九九年熊本大学大学院文学研究科修了、二〇〇〇年から坂本善三美術館の学芸員として活躍して来られました。善三作品に様々な角度から焦点をあてて親しみやすく紹介する展覧会を続けながら、町民や町内各地域を巻き込んだ愉快な現代美術展や色々なイベントも開催されています。また、小・中学校と連携した鑑賞体験活動なども積極的に続け、小国町に欠かせない美術文化センターとしての役目を果たしておられます。これらの活動で、財団法人地域創造より平成二七年度「地域創造大賞（総務大臣賞）」を受賞されました。今回の講演は、私たちに身近な坂本善三先生の作品の魅力について、改めて気づかされ

た興味深い貴重なお話でした。その概要を紹介いたします。

坂本善三先生は一九一一年三月十五日に小国町で生まれ、一九八七年十月十四日に七六歳で亡くなられた。若い時には具象画を描いていたが、四六歳の時に単身渡欧し約一年半滞欧して、帰国して抽象画になり、それからグレイの画家になった。亡くなられて八年後の十月十四日に小国町立坂本善三美術館が開館した。今年で三三年目になるが、これまで善三作品を扱った九一のタイトルの展覧会を開催して来た。初期は「善三の水彩画」とか「善三の人物画」とかいうテーマだったが、最近では「善三、熊本を描く」とか「子供と楽しむ善三作品」など、色々な切り口でテーマを設定している。九一本もやっているのに少しも飽きが来ない。毎日作品を眺めていても、「これはかっこいいね」とか新しい気づきがあるし、「今度はこういう展覧会をやりたい」とか次々に発想が浮かんでくる。他の個人美術館ではこういうことはないのではありませんか。毎年、四つか五つの企画展をやっているのに全く飽きがこない。これが善三作品の魅力の一つだと思っている。

「なぜ、飽きずに新たな企画が続けられるのか」を考えると、それは善三作品に「多様性と普遍性」があるからだ、と思う。まず「表現の多様性」がある。具象作品から、抽象作品へと幅の広い変化もある。ヨーロッパに行つたから抽象画に変わったと言われているが、そうではなく、ヨーロッパに行く前の内戦時代に抽象に変わる一つの契機があったのではないかと思っている。「外輪山の絵を描くと、後ろにも同じように外輪がある。等価値だと思った」という言葉がある。空と阿蘇と街が同じ価値で同じ大きさで存在している、という世界の認識が「等価値」という言葉を生んだ。阿蘇山が主役で空や手前の家並みは脇役である、ということではなくて全てが等価値で存在している、という世界観。表現したいものが同じ価値を持っている、世界がそうできていくという強い認識が渡欧前に既にあった。渡欧してバリの建物を描いているときに、建物に構造があるように絵画にも特有の構造があるはずだ、絵画として成立させている構造があると気づいた。近代絵画史の中で絵画は何かの再現ではなく絵画として独立していなくてはならないという考えがあるが、坂本はそのことに理論からで

はなく、風景画を描いていく中で体得していった。善三の目に映ったこの現実、この世界を表現する方法として抽象画にたどり着いた。それはアメリカなどで進んでいた抽象絵画への道とは異なるものだった。

次に、「技法の多様性」という

ことがある。油彩画だけでなく、水彩画、水墨、版画、陶器の絵付けなどもある。平面ではあるが、使っている素材（メディウム）によって、表現が変わっているのも善三作品の特徴である。その素材の声を聴いて、その素材でしかできない表現を模索し、素材との一瞬の対話のようなものが感じられる。リトグラフでも版の色を重ねることで複雑な色彩や重厚なマティエールをつくりあげている。雑誌の小さなカットにしても、その場にピッタリな表現をしている。さらに「時代を超えた普遍性」があげられるだろう。これが善三作品の最大の特徴と言ってもいいかもしれない。静物画の作品《器物》は五十年代の作品だとわかるように、具象ではその時代のカラーを持っている。しかし抽象画になると、三十年前に描かれた作品でもいま完成した作品のようにも見え、時代を超えている。なぜ、それが可能になったのか。それは

徹底的にローカルだったことによる。つまり、善三自身が自分の身体で知覚し体得したことが絶対的な起点になっていることが、普遍性につながっている。徹底的に個性であることローカルであることは、逆にグローバルなひろがりや普遍性を持つことであろう。

次に善三作品を語る時のもう一つのキーワード「風土」ということについて考えたい。私は宮崎の出身なので日の出は海から上がっているように描くが熊本では山の間から上がるように描く。そういうその土地の自然との暮らしの中からつくりあげられた心の仕組みのようなもの、知らず知らずのうちに私たちの心を形成しているもの、つまり「自分」というものを作るのが風土というものではないか。小国に住んで風景を見ると、善三作品を感じさせるものがたくさんある。坂本善三の心の中にはたくさんある。故郷の原風景が入っていて、いつでもそれを取り出して表現に結びつけることができたのではないか。あるいは、そういう心の奥の記憶を取り出して表現しようと願っていたのではないか、だから多くの人に普遍的なものとして感じられるようになったのではないか。

そういう善三作品を見ていて感じるものは、まず「日常の生活の大切さ」。善三作品に描かれているのは、毎日の暮らしの中で見ているようなものが多い。暮らしの中で自分を感じ、自分の心にきちんと刻むことの大切さを教えられているように思う。善三作品は、善三自身の毎日の暮らしと密接につながっている。要するに、毎日の暮らしの中にこそ、善三作品の世界、深遠な世界への入口があり、普遍性へつながる水脈が潜んでいるということだろう。だから善三作品から教えられるのは、毎日の作品から教えられるのではなく、日々の些細な出来事であっても「自分を感じ」、「自分の言葉」で「自分の心に刻む」ことが非常に大事であること。そしてそうすることが「豊かな生活」、「豊かな人生」につながるということ。画家の生活、作品を制作する生活は、そういう豊かな人生を歩んでいることを、善三作品を見ることで、多くの人に感じ取ってもらいたいと願っている。また、それは「美術の力」なのではないかとも思う。そういう意味で、善三美術館が善三芸術の根っこを育んだ小国郷にあることはとても素晴らしいことだと思っている。

子どもたちに「美術の力」を伝える

ために、現在、小学一年から中学一年まで、授業で全員が善三美術館に来るようになった。だから中学一年まで、七回は善三作品を鑑賞する。そうすると、作品を前に思ったことを素直に自由に言うようになったり、仲間が感じたことを聞いて共感することができるようになってくる。それは、子どもたちの心の中の引き出しが豊かになっていくことになるのではないかと、思う。小学一年から個人別にファイリングしておいて、卒業の時に六年間分を綴じたものをプレゼントして喜んでもらっている。

また、さまざまな現代美術の作家を呼んで、美術と町民をつなぐ展示会もやっている。住民と交流しながら美術展を行なうことで、美術と町民の懸け橋になるようにと願っている。日常の中の平凡な出来事に喜びや感動を見出すこと、生活の中に美術を見出すことに、現代美術の表現や作家の活動は非常に有効だと思っている。さらに最近では「コレクション・リーディング」という活動も行っている。これはジャンルを超えたゲストを迎えて、善三作品を再解釈するというシリーズである。私自身も、これまでとは違う視点で善三作品を見てみたい、ということもあって始めた。昨年は美術家の藤浩志を呼んで行なった。町民が自分の

生活や自分の関心事から善三作品を見て、感じたこと自分ならではの解釈をそのまま展覧会にしようというところを行ない、ユニークな展覧会になった。また今年も、んまつーボスというダンスユニットと作る善三展「拍手し展！」というのも計画している。

こういう活動は、善三作品へのアプローチの幅をさらに広げる可能性があると思っている。このようなことができるのも、善三作品に多様性と普遍性があり、それは包容力と新しくあり続ける革新力を持っているということ。つまりそれぞれの感性を許容して新しい価値を生み出す力があること、新しい価値を生み出す力が「美術作品にあるということ」は、坂本善三美術館だけではなく全ての美術館が伝えていくべきことだと思っている。これからも、善三作品を通して豊かな「美術の力」を伝え続けていきたい。

（要約文責・井上正敏）

